

平安京左京三条四坊十町

発掘調査現地説明会資料

2003年11月22日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京三条四坊十町発掘調査現地説明会資料

今回の調査経過

調査場所 京都市中京区御池通富小路西入東八幡町579（元京都市立京都柳池中学校）

調査期間 2003年8月11日～2004年5月31日（予定）

調査面積 約2,113m²

調査主体 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

今回の調査は、京都御池中学校・複合施設整備等事業に伴う発掘調査です。元京都市立京都柳池中学校の調査としては、1979年の第1次調査（旧体育館）に続く2回目です。

今回の調査では、万里小路（現柳馬場通）と三条坊門小路（現御池通）に面した宅地・町屋の平安時代から江戸時代の遷り変わりを明らかにすることを目的としています。また、下層では弥生時代から古墳時代の村の跡などが発見される可能性があるため、これも確かめます。

調査地周辺の歴史

調査地は、縄文時代から飛鳥時代（約2,200～1,300年前）の烏丸御池遺跡に含まれます。第1次調査でも、古墳時代初期（約1800年前）の川跡を発見し、土器が多量に出土しています。

平安時代（約1200～800年前）には平安京が造られ、調査地は左京三条四坊十町にあたります。この町は、北側を押小路（現押小路通）、西側を万里小路（現柳馬場通）、南側を三条坊門小路（現御池通）、東側を富小路（現富小路通）に囲まれ、調査地はその南西部に位置します。文献では平安時代中期に、右大臣藤原定方の「中西殿（山井西殿）」が、鎌倉時代には善法院が造られたとされていますが詳細は不明です。

室町時代（約670～400年前）には、周辺の調査で当時の遺構・遺物が多く検出されたことから、この地域が活発に利用されていたことがうかがえます。この頃、京都の町は大きく上京・下京の二つに分かれ、調査地は下京の北東部にあたります。

桃山時代（約400年前）には豊臣秀吉によって京都改造が行われ、富小路が現在の位置に造り替えられて、ほぼ現状の地割ができ上がります。

江戸時代（約400～130年前）には町屋の中に含まれ、『寛永十四年（1637）洛中絵図』には「八幡東横丁」と「虎石町」が記されています。

明治六年（1873年）にはこの地に第二十七番組小学校（柳池小学校）が造られます。その後、京都市立京都柳池中学校となり、現在にいたります。

調査地の状況

調査は現在、江戸時代前半（約200～400年前）の遺構について行っています。

調査区の全域で建物の柱穴や礎石・井戸・ゴミ捨て穴（土壇）などを数多く発見しており、当時は町屋が建ち並んでいたことをうかがわせています。これらは、調査区の中央部で見つけた北

面する東西方向の石垣（石垣1）によって大きく北と南に分けることができます。

南側では、柱穴や礎石、黄色い粘土を貼った土間などが見つかりましたが、建物の復元はできていません。井戸は石組みのものが多く、柳馬場通や御池通近くに集まっており、通りに面して町屋が並んでいたことをうかがわせています。

北側の一画では、多くの炉跡を集中して発見しました。その北側はくぼ地になっており、ここにはるつぼ片・羽口片・灰・炭・鉍滓などの金属加工に関する遺物と、土器などの日用品をいっしょに捨てていました。このあたりが鑄造に関する工房と推定できます。井戸は、石組みのものとするつぼ組みのものがあり、やはり柳馬場通近くに集まっています。室も、石組みのものとするつぼ組みのものがありますが、柳馬場通からやや離れた奥側にあります。こうした貯蔵施設は町屋の奥にあることがわかります。

出土した遺物のようす

出土した遺物には、土器と瓦・石製品・金属加工関係・骨加工関係の遺物があります。土器は大量に出土し、土師器と呼ばれる素焼きの土器のほか、黒色の瓦器、釉薬を掛けた陶器・中国製の磁器などがあります。他には、硯・銭貨などが出土しています。

金属加工関係の遺物には、るつぼ・とりべ・鑄型・ふいごの羽口などがあります。

るつぼには大型のものと、小型のもの2種類があります。大型（口径10cm・高さ16cm）のものは、長胴で口がすぼまる形のもので、側面に穴があいています。小型（口径11cm・高さ16cm）のものは、ほぼ球形で上部に円形の口があり、側面に把手が付いています。いずれも中に木炭と金属を入れて炉の中で溶かし、火箸でつかんで取り出して、型に流し込んだと考えられます。大型のるつぼは、使用後、井戸や地下室の構築材として再利用されていました。とりべは、ほぼ球形（口径7cm・高さ6cm）で、上部に円形の口があり、側面に把手が付いています。炉の中で溶けた金属を、把手を火箸でつかんで取り出したと考えられます。

発見した鑄造関係の工房について

今回発見した炉跡は20箇所近くにおよびます。これらは柳馬場通から東へ20mの位置から東側、南北6m・東西15mの範囲にみられ、さらに調査区の東側調査区外に続くと思われる。炉跡群の北側と南側は径30cm程度の石で石垣（石垣2・3）を積み上げています。炉跡は近接して作り替えられているため、配置がわかりにくいのですが、各炉跡は約1m間隔で東西方向に並び、南北に約3m離れて2列あります。その間の床面には部分的に黄色い粘土が残り、土間を作っていたと考えられ、ここで鑄込みなどの作業が行われたと推定できます。

炉跡は小型のものと大型のものがありますが、いずれも上部が削られ基底部だけが残っています。小型の炉跡（炉跡3など）は、一辺約50cmの円形又は方形で、底はすり鉢状となり、深さ10cm程度残っています。底部付近にはふいごの羽口を斜め方向に挿入しています。炉穴内にはるつぼを入れて使用する型式の炉と考えられます。大型の炉跡（炉跡22）は、直径約34cmの円形で底は

平坦、上部がすぼまった型の炉で、深さ30cm程度残っています。炉の内側は溶けており、周りは小型のものに比べ焼けしまっていることから、かなりの高温になる炉と考えられます。

今回の調査の成果

今回の調査では、江戸時代前期の鑄造関係の工房が良い状態で残っており、貴重な発見となりました。

るつぼ内に残っていた鋳滓を分析した結果、真鍮（銅と亜鉛の合金）を鑄造していたことがわかりました。作られた製品そのものは、出土していないので不明ですが、るつぼの大きさなどから考え、真鍮の地金（インゴット）などと推定できます。工房は、炉の数が多いことや、るつぼや炭などの廃棄物が大量に捨てられていたことから考え、大規模であったことがうかがえます。

調査地周辺は、寛文五年（1665）刊行の『京雀跡追』に「あかがねや 柳のば々押小路下」、貞享二年（1685）刊行の『京羽二重織留』に「真鍮問屋 柳ば々押小路下ル町 七右衛門」とあり、銅関係の店から真鍮関係の店に変わっています。今回発見した工房は、製造物や出土した土器の時期などから、真鍮関係の店舗兼製造所にあたる考えられます。江戸時代前期には、中国から真鍮製造の技術が伝えられており、これが京都でも行われていたことが明らかとなりました。

調査地周辺では、烏丸御池北東隅の調査で天秤計りの鑄型、御所南小学校や地方裁判所の調査で鏡の鑄型、御所内の調査で金具の鑄型が出土していること、また、飾り金具の職人や鏡造り職人が住んでいたことなどから、この地域で金属製品の製造が盛んに行われていたことが明らかとなりました。

^{しんちゅう}
真鍮 銅（Cu）と亜鉛（Zn）の合金。用途に応じて成分比がちがうものが作られています。銅70% - 亜鉛30%のいわゆる7・3真鍮は美しい黄金色の光沢をもち、低温での加工に適しています。また、6・4真鍮は堅く摩耗に強いものです。

真鍮は中国では新石器時代末（紀元前2000年頃）には既に製法が知られていました。しかし、一般的になったのは17世紀初め頃からと考えられ、それまで青銅（銅と錫の合金）で作られていた銭貨が崇禎通寶（1628年初鑄）から真鍮にかわっています。同じ頃、日本にも製法が伝えられたとみられますが、詳細は明らかではありません。なお、日本の銅貨では1768年鑄造の寛永通寶から真鍮貨になっています。

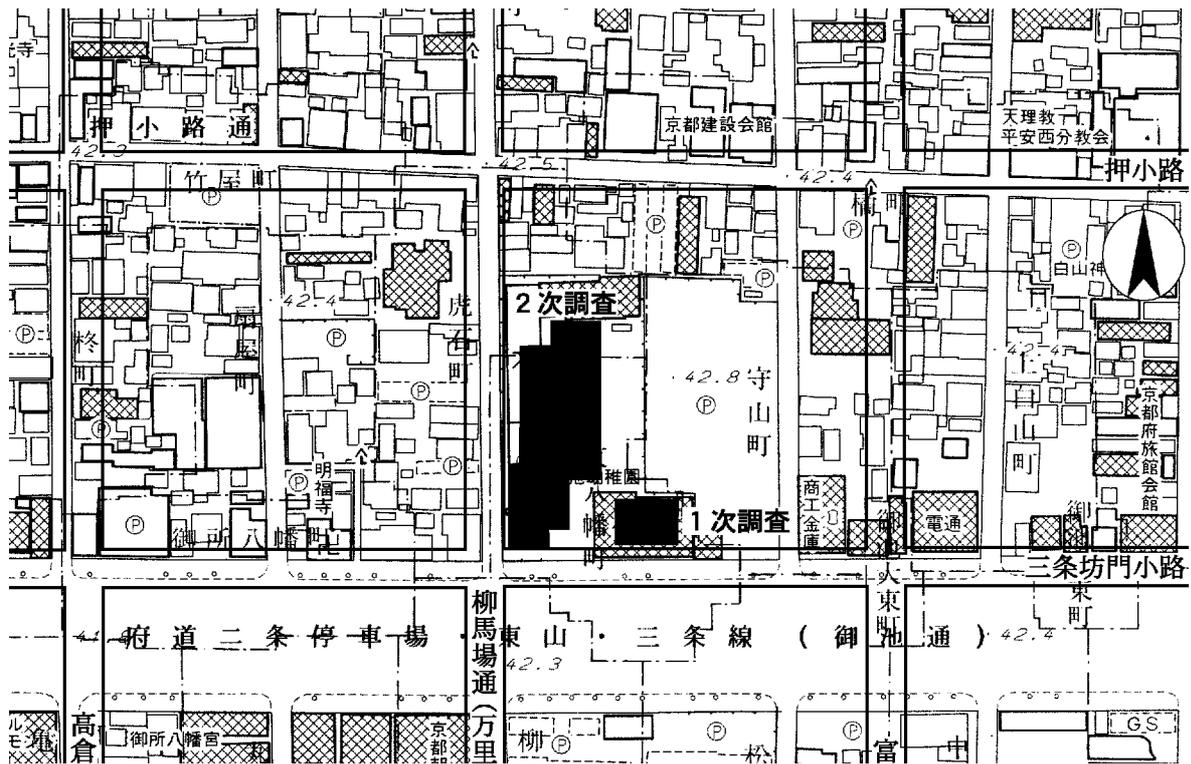


図1 調査地位置図 (1 : 2,500)

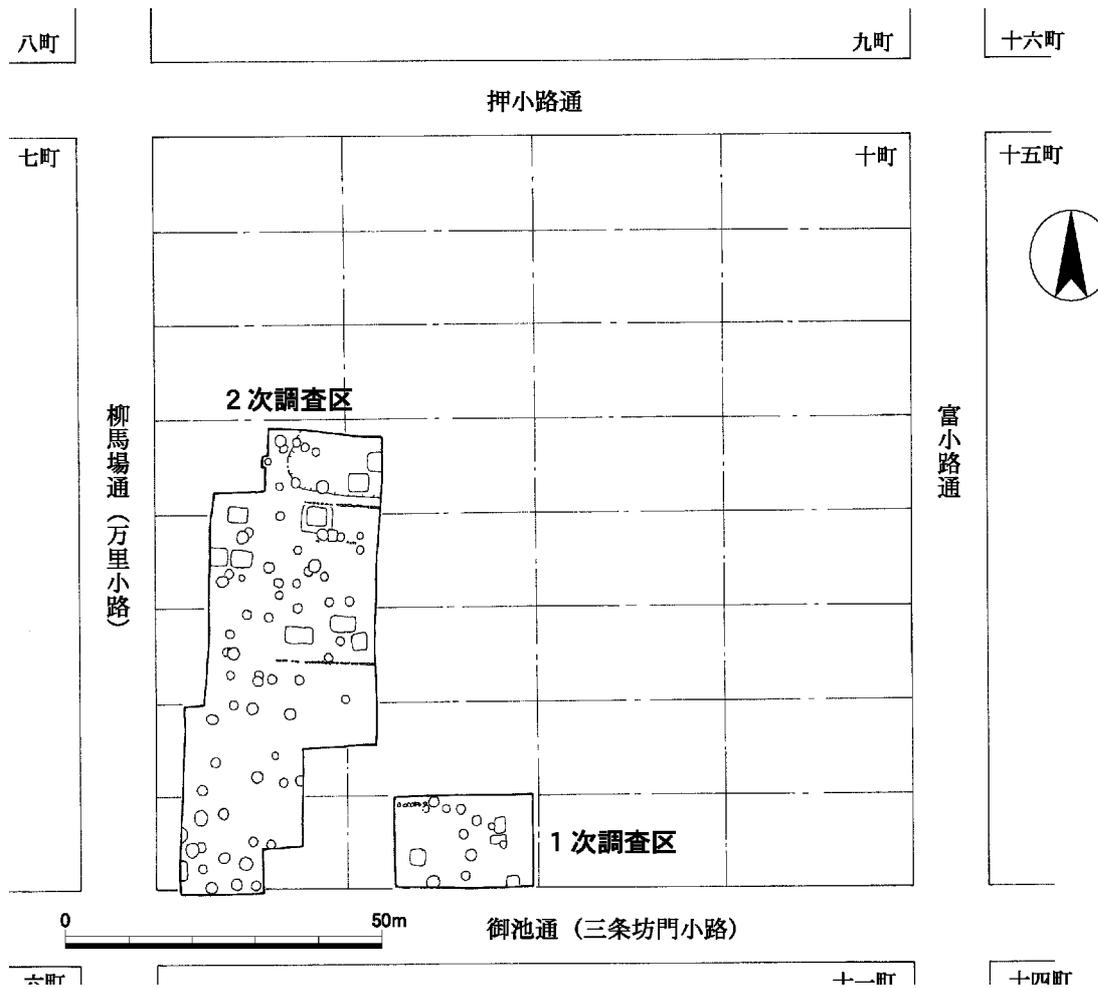


図2 調査区配置図 (1 : 1,200)

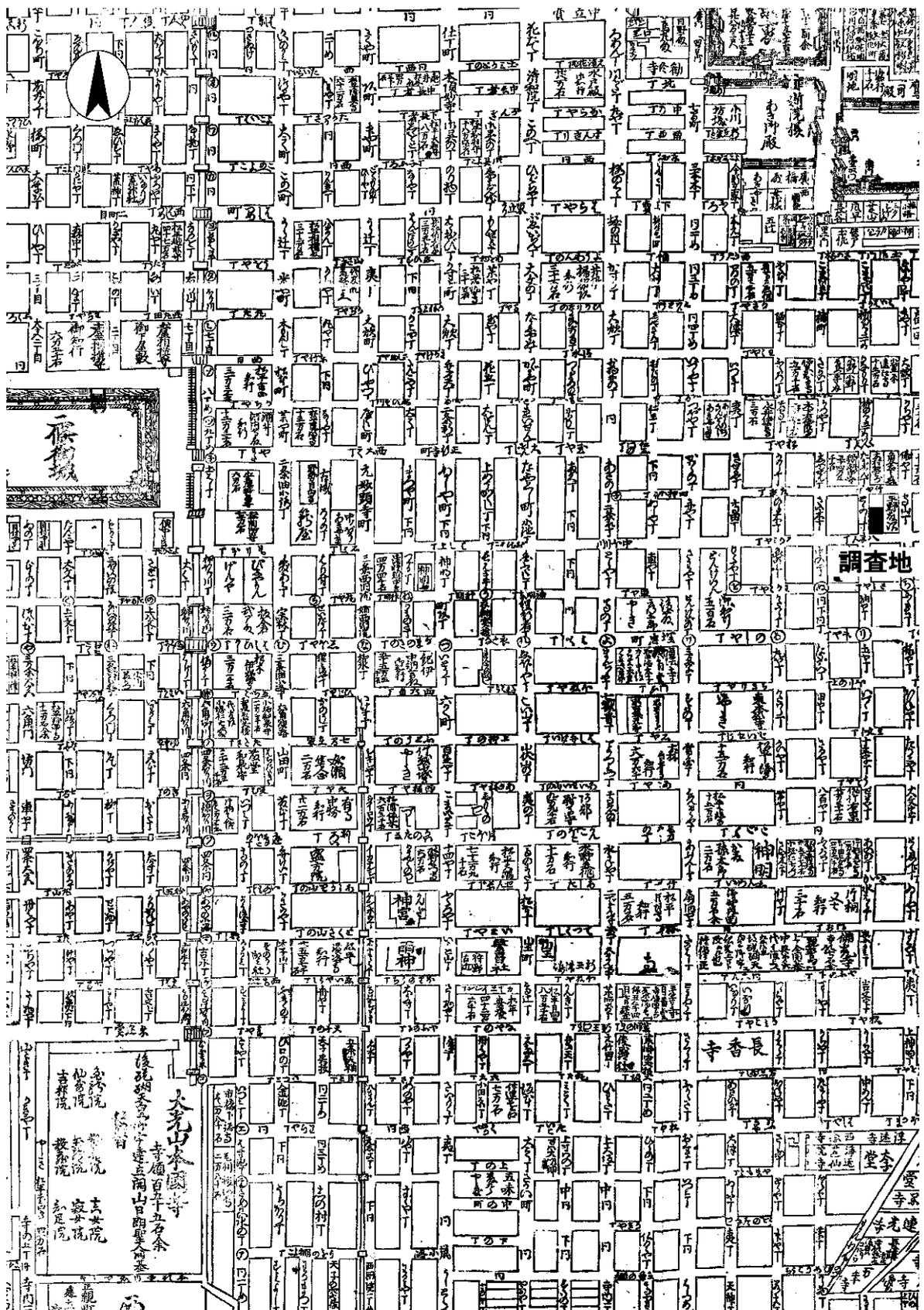


図3 江戸時代のようにす〔新撰増補京大絵図 貞享三年(1686)より〕

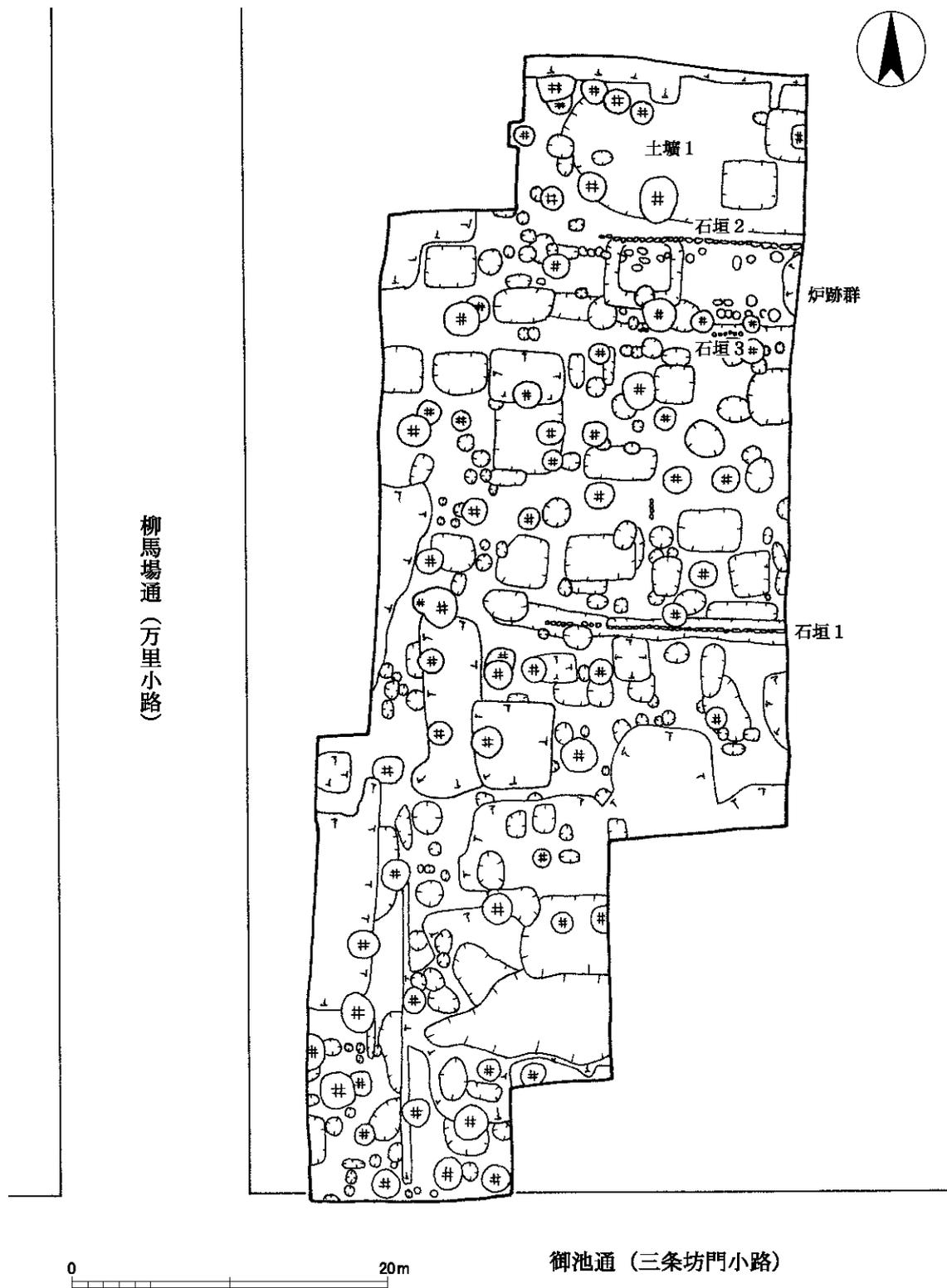


図4 第2次調査地のようす (1 : 400)

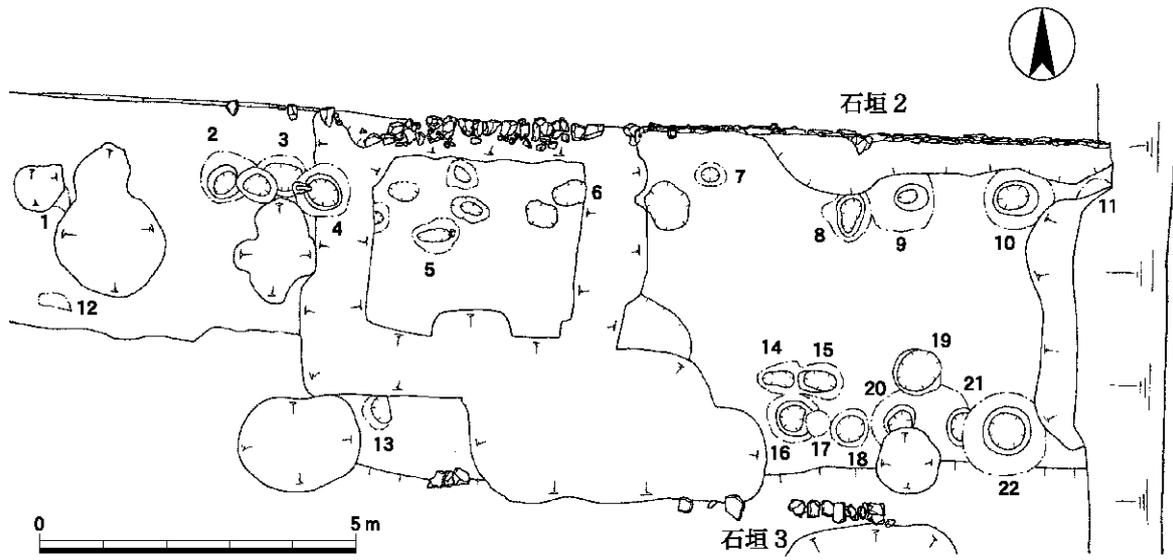


図5 工房跡のようす (1 : 120)

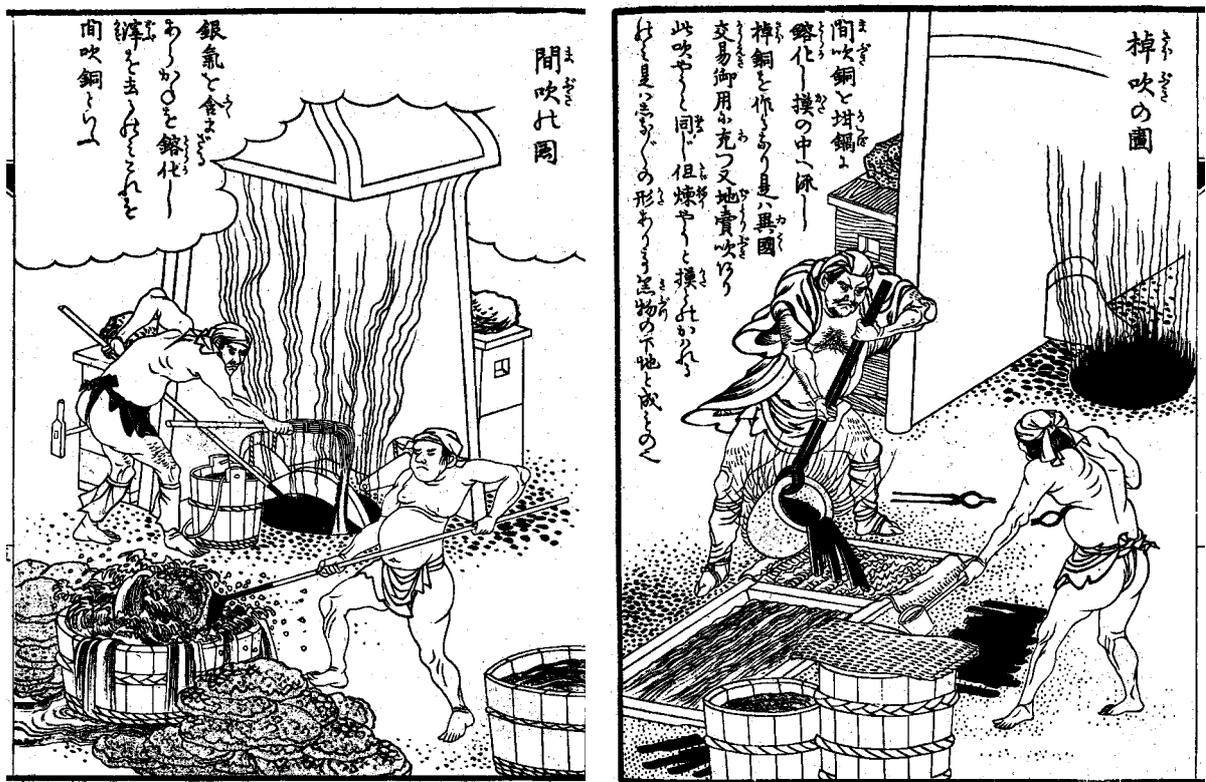


図6 鑄造作業のようす [『鼓銅図録』より]

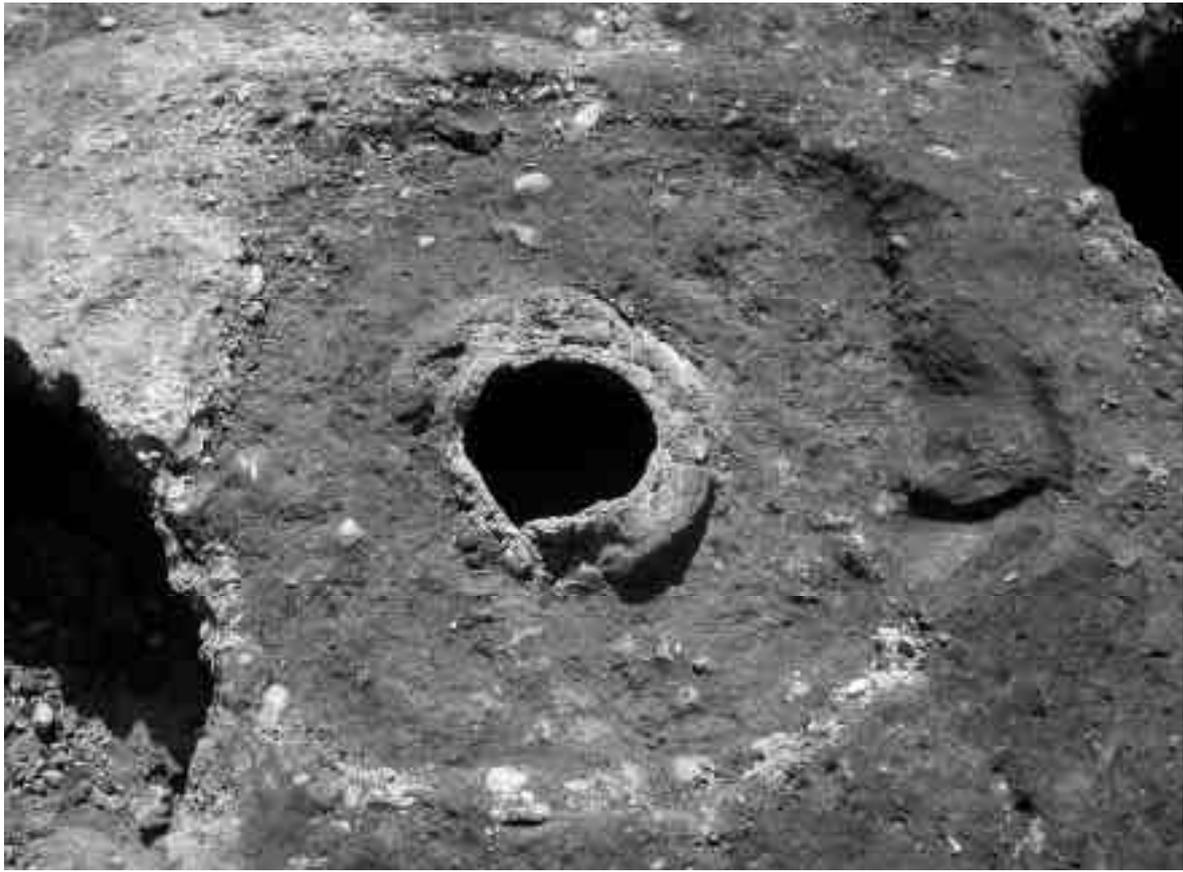


写真1 炉跡22

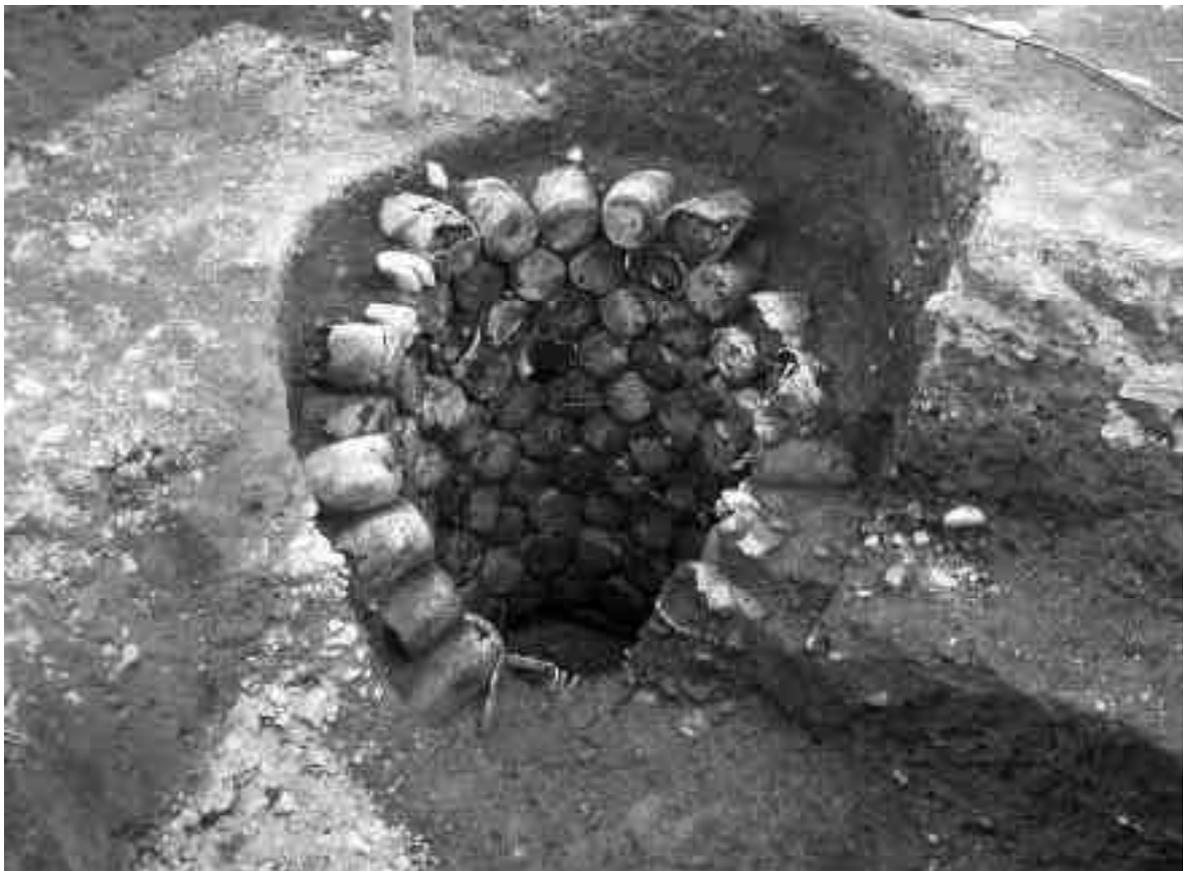


写真2 るつぼ組み井戸